

ライフケアガーデン湘南

症例概要 利用者 : 80代 男性 要支援2
利用期間 : 令和3年10月～令和4年6月現在
主疾患 : 両側白内障・両側緑内障
既往症 : 高血圧・脂質異常症

経過 : 現役時代は証券会社に勤務していて、仕事が忙しく趣味等は持てなかった。40歳代で両側白内障を発症、50歳代で両側緑内障を発症しそれぞれ治療はしていたが、視力は緩やかに弱くなっていった。60歳代で退職してからブラインドダンスを始める。80歳代に入り完全失明となった。全盲である入居者さんと信頼関係を築き上げ、趣味であるブラインドダンスを通して、ホームでの充実した生活を送っていただける様に試みた症例。

内 容

妻と二人暮らしで、自宅内であれば転倒なく生活できており、外出時に介護サービスのガイドヘルパーを利用されていた。コロナ前は、2～3回/週ブラインドダンスに通っていた。

妻が大腿部骨折にて退院されて自宅に戻られたが、妻の体力の衰えもあり当ホームへ入居となった。

入居時のご本人の希望は「コロナが落ち着けば、ブラインドダンスへ通いたい」、ご家族の希望は「散歩をさせてほしい」「体操に参加させてほしい」であった。

入居当初は、初めての場所であることや、面識のないスタッフ達と過ごす事に不安な様子が見られていた。スタッフにもご本人のADLや日々の過ごし方を把握するまでスムーズな対応をする事が出来なかった。昼夜を問わずナースコールやセンサーマットの反応があり、その都度訪室し傾聴を行い、介護士や看護師が内容に応じた対応を行い不安軽減や安全確保に努めた。日にちが経つにつれて、ご本人とスタッフ間の意思疎通が円滑となり、不安からくるナースコールの回数は減少した。また、日々の過ごし方が整うようになり、フットセンサーを外すこともできた。

スタッフとのコミュニケーションが良好になるにつれて、会話の内容は、疾患や不安からくる訴えよりも趣味や会社員の頃をお話しされることが多くなってきた。視力が弱くなってから始めたブラインドダンスは週に2～3回通われていて、役員をされていたとのことであった。コロナ禍になってからは、ほとんど通えていないと寂しそうに話されていた。

スタッフ間でご本人の希望に近づける介入方法について話し合いをもった。

ホーム外へお連れするのは社会情勢を鑑み実行せずに、ホーム内でスタッフと共にブラインドダンスを実施することにした。お声掛けした際には「本当にここでできるの?」と不安そうな言動もあったが、始まると大変楽しそうにされていた。終了時には「もう、終わりなの?」と、まだまだダンスを続けたい様子であった。これ以降も毎回楽しそうにダンスをしている姿を見ていると、欲求を満たすことの重要性を感じることができ、スタッフのやりがいにもつながると考える。

今後も利用者さんに「輝きの一日」を提供できるようにチームワークを整えて接していけるように心掛けていきたい。